

中学生の学業成績の向上に影響を及ぼす社会的比較

Social comparison in improved academic performance with a sample of junior high school students

外山 美樹

(日本学術振興会特別研究員 東京成徳大学大学院)

Miki TOYAMA (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science,
Faculty of Humanities, Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究の目的は、中学生の学業成績の向上に及ぼす社会的比較の役割を探ることであった。被調査者は、中学生545名であった。本研究の結果より、中学生の学業成績の向上における社会的比較の影響は、学年によって異なることが明らかにされた。まず、中学1年生においては、数学と国語の2教科ともに、自分よりも幾分優れた友人と比較する傾向と相対的評価(他者と比べての自分自身の評価)が学業成績の向上を独立に予測することが示された。よって社会的比較は、日常生活においても、遂行水準の決定要因であることが明らかにされた。一方、中学2年生ならびに3年生においては、このような傾向は見られなかった。これらのことより、社会的比較の影響は、時間が経つにつれてその影響がなくなっていくことが示唆された。

キーワード：社会的比較、学業成績の向上、中学生

問題と目的

社会的比較 (social comparison) とは「自分と他者とを比較することの総称」(Festinger, 1954) と定義されるが、われわれは社会的比較によって、自分の明確な位置づけができるようになり、将来に対する方向づけも可能となる。Festinger (1954) が社会的比較過程理論を提唱してから、半世紀が過ぎようとしているが、その間に社会的比較に関する研究は精力的に行われてきた (e.g. Butler, 1992; Frey & Ruble, 1985; Pomerantz, Ruble, Frey, & Greulich, 1995)。

ところで、これまでの社会的比較に関する研究の多くは、比較(上方比較、下方比較、並行比較)

の選択に影響を及ぼす状況の要因に焦点を当ててきたが、比較の選択後の影響については焦点が当てられてこなかった (Blanton, Buunk, Gibbons, & Kuyper, 1999; Wood, 1989)。これは日常場面における社会的比較について特にそうである。例えば、社会的比較は、学校のクラス環境において重要である (Frey & Ruble, 1985; Goethals & Darley, 1987; 外山, 2001; Veroff, 1978) にも関わらず、児童・生徒の学業的遂行 (e.g. 学業成績) における社会的比較の影響については、これまで組織的に研究がされてこなかった (Huguet, Dumas, Monteil & Genestoux, 2001)。

こういった現状を踏まえて、最近になってよう

やく、比較の選択が児童・生徒の学業場面における遂行に及ぼす影響についての研究がされるようになってきた。Blanton et al. (1999) は、中学1年生を対象にして、生徒が自分よりも学業成績の良いクラスメイトと自分の学業成績を比較しており、こうした成績の高い他者と比較する傾向が、個人の学業成績の向上を予測することを見いだしている。Huguet et al. (2001) も同じく中学1年生を対象にして同様の結果を得ている。

また、学校のクラス環境における社会的比較の影響を示唆する研究として、Guay, Boivin, & Hodges (1999b) の研究がある。Guay et al. (1999b) は、児童の学業成績と学業コンピテンスの関連性において、親しい友人の学業成績が調整効果として働くことを見いだした。同様の結果は、中学生を対象にした外山 (2004) においても得られている。つまり、親しい友人の学業成績が低い時には、個人の学業成績と学業コンピテンスの関連性は強いが、親しい友人の学業成績が高い場合には、両者の関係は弱かった。すなわち、自分と心理的に近い他者の学業成績が、個人の学業コンピテンスと学業成績の関連性に影響を及ぼすのである。この研究においては、親しい友人との社会的比較が実際に行われているのかどうかは直接的には調べられていないものの、社会的比較のプロセスが働いていることを示唆するものであろう。

さらに、Marshら (Marsh, 1987, 1994; Marsh, Chessor, Craven, & Roche, 1995; Marsh, Kong, & Hau, 2000) は、学業に対する自己概念 (学業的自己概念; academic self-concept) は個人の学業成績と正の相関関係にあるが、学校の平均的成績 (学校のレベル) とは負の相関関係にあることを見だし、“井の中の蛙効果 (big-fish-little-pond effect)” と呼ばれる概念を提唱した。これは、同じ成績の生徒であっても、良くできる生徒ばかりのクラスあるいは学校の中では、優秀な生徒たちとの比較のために否定的な学業的

自己概念を形成し、あまりできない生徒ばかりのクラスや学校の中では、レベルの低い生徒たちとの比較のために好ましい学業的自己概念を形成しやすいというものである。これらの研究も、個人の学業成績と学業的自己概念との間に介在するプロセスとして、社会的比較過程を想定しているものと考えられる。

児童・生徒の学業成績や学習意欲に影響を与える要因としては、これまで、学業コンピテンス (e.g. Guay, Boivin, & Hodges, 1999a)、関与度 (e.g. Tesser, 1988)、目標志向性 (e.g. Elliot & Church, 1997; 田中・山内, 2000) あるいは達成目標志向性 (e.g. 上淵, 1995)、内発的興味 (e.g. Boggiano, Main, & Katz, 1988) など個人内変数のみを扱うことが多かった。ところが近年、動機づけ研究において、社会的文脈の中で論じられることの必要性が指摘されている (松岡, 2003; Wentzel, 1999)。我々は他者とのさまざまな関わりの中で生活しており、そうした中で形成される自己概念や動機づけは、すぐれて社会的なものであり、他者規定的な側面を強くもっている。本研究は、中学生の学業成績の向上に影響を与える要因として、社会的比較過程に焦点を当てたものである。既述したように、児童・生徒の学業的遂行 (e.g. 学業成績) における社会的比較の影響を検討した研究は海外においても少なく、わが国においては筆者が知る限り全く見られない。一般に集団志向的である日本人においては、社会的比較が多く生じ、また比較した結果が大きな意味をもつことが示唆されている (高田, 1992)。よって、社会的比較過程に注目した学業成績の向上を検討することは、意義深いものと考えられる。

ところで、社会的比較には比較水準の選択 (comparison-level choice) と相対的評価 (comparative evaluation) の2つの構成概念が想定されている (Blanton et al., 1999; Huguet et al., 2001)。比較水準の選択というのは、比較する他者の遂行の水準であり、例えば、自分が比較

する友人の学業成績のことを指す。一方、相対的評価とは、他者と比べての自分自身の能力の評価のことである。研究者の中には、これら社会的比較の2つの構成概念を代替できるものとして言及しているものもいるが、両者は異なった基礎となるプロセスを反映していることを示す知見もある (cf. Wood, 1996)。事実、Blanton et al. (1999) や Huguet et al. (2001) は、中学1年生の学業成績の向上には、比較水準の選択と相対的評価が独立に関係していることを示している。

そこで本研究では、中学生の学業成績の向上に影響を及ぼす要因として、社会的比較の2つの構成概念である比較水準の選択（比較する友人の学業成績）と相対的評価を取りあげることにした。比較水準の選択が個人の学業成績の向上へ影響を及ぼすことを示した研究は先に紹介した通りである。相対的評価においては、それが高い人は自分が他者よりもできるとみなしているので、自己効力感と高い期待をもって課題に接近し、そのことが遂行の向上へとつながるにちがいない (e.g. Bandura & Jourdan, 1991; Buunk, 1995)。しかし、相対的評価における研究の多くは、生活満足度 (e.g. Diener & Fujita, 1997) や精神的健康 (e.g. Klein & Weinstein, 1997) に焦点を当てており、遂行に関連した研究は、先に述べた Blanton et al. (1999) と Huguet et al. (2001) の研究以外は見当たらない。

ところで、Blanton et al. (1999) や Huguet et al. (2001) の中学1年生のみを対象にした研究では、生徒が自分よりも成績の高いクラスメイトと自分の学業成績を比較することが報告されている。しかし、成績の高い他者を比較水準の選択とすることは、自分を鼓舞し向上しようとする動機づけを促進することにつながる一方、自己の不完全さを改めて思い知らされ、意気消沈に至る危険性をはらんでいる。先に紹介した研究 (Guay et al., 1999b; Marsh, 1994) においても、研究方法や観点が異なるため純粋に比較することはで

きないが、友人の高い学業遂行が個人の自己概念にネガティブな影響を与えることを示している。また、社会的比較の影響は、新しい環境において特に大きく、時間を経るにつれてその影響は小さくなっていくという指摘 (Huguet et al., 2001) もある。よって、そうした個人の自己概念にネガティブな影響をも与える可能性のある比較水準の選択は、学年が進むにつれて変化するかもしれない。そこで本研究では、学業内容が難化し、定期的にテストが行われるなどして学習の評価が行われる中学生を対象にし、先行研究 (Blanton et al., 1999; Huguet et al., 2001) のように中学1年生のみを扱うのではなく、中学2年生ならびに3年生も対象にして、横断的にはあるがその発達の变化を検討することにした。

本研究における仮説は以下の通りである。中学1年生のみを対象にした先行研究 (Blanton et al., 1999; Huguet et al., 2001) の結果と一致して、中学1年生においては比較水準の選択と相対的評価の高さは、学業成績の向上に独立に関連があるだろう。ところが、社会的比較の影響は、新しい環境において特に大きく、時間を経るにつれてその影響は小さくなっていくという指摘 (Huguet et al., 2001) により、中学2年生ならびに3年生においては、比較水準の選択と相対的評価の高さは、学業成績の向上において影響が小さいかあるいは関連がなくなるであろう。

方 法

被調査者

茨城県内の公立中学校1年生173名（男子91名、女子82名）、2年生190名（男子105名、女子85名）、ならびに3年生182名（男子82名、女子100名）の計545名（男子278名、女子267名）であった。

手続き

調査時期は、2003年7月～12月であった。被調

査者は、1年間に学校による定期テストを3回（1学期末テスト、2学期末テスト、3学期末テスト）受けており、本研究では、1学期末テストと2学期末テストにおける数学と国語のテスト得点が用いられた。本研究において、数学と国語の2教科を取り挙げた理由は、この2教科は互いに対比されやすい教科であり、それぞれの学業的自己概念においても、様々な教科の中で最も関連性が弱いことが報告されている（市原・新井、2004）からである。よって、この2教科において同様の結果が得られることは、様々な教科への一般化を示唆しうるもの（ボトムアップ的なアプローチ）となろう。

被調査者には以下の質問紙が、2学期末テストの約2週間前に、各学級の担任教師によりクラスごとに集団で一斉に実施された。調査は無記名方式で、学年、クラス、出席番号、性別をフェースシートに記入してもらった。本調査は、大学での研究の一環であり、答えた内容が先生や友達あるいは家族に洩れることは絶対にないことをフェースシートに明記するとともに、質問紙を配布した後担任教師より教示してもらった。

質問紙

相対的評価 同じクラスの友達多くと比べて、数学／国語ができるかについて、それぞれ、5段階評定（1・・・できない、2・・・あまりできない、3・・・友達と同じくらい、4・・・少しできる、5・・・できる）による回答が求められた。

比較水準の選択 比較水準の選択は、数学と国語の教科それぞれにおいて、日頃、学業的遂行（テストの点数や成績、出来具合など）を比較するクラスメイトをフルネームで記述させることによって得られた。誰とも比較しない場合には、空白のままでもいいことも教示した。

学業成績

学業成績は、被調査者の数学と国語の1学期末テストと2学期末テストの点数を用いた。指名されたクラスメイトの学業成績には、1学期末テストの点数が用いられた。得点の範囲は0点から100点であった。

結果と考察

相対的評価

相対的評価の2項目（数学、国語）において、学年別に尺度の中央値（=3）との違いを t 検定により検討した。その結果、2年生の国語を除いてはすべて、ネガティブ・バイアスが見られ、多くの生徒が自分はクラスの友達よりもできないとみなしていることが明らかにされた（1年生：数学 $M=2.67$, $t=4.08$, $p<.01$, 国語 $M=2.85$, $t=2.21$, $p<.05$; 2年生：数学 $M=2.53$, $t=5.33$, $p<.01$, 国語 $M=3.13$, $t=1.69$, $n.s.$; 3年生：数学 $M=2.27$, $t=9.15$, $p<.01$, 国語 $M=2.55$, $t=6.89$, $p<.01$ ）。また、数学と国語の2教科を比べた場合には、全学年ともに国語よりも数学においてネガティブ・バイアスが強いことがわかった（1年生： $t=1.89$, $p<.10$, 2年生： $t=6.63$, $p<.01$, 3年生： $t=2.98$, $p<.01$ ）。

これらの結果は、人は自分の能力において、非現実的に楽観的であるという指摘（e.g. Taylor & Brown, 1988）や、相対的評価の平均値が中央値（=3）に偏り、クラスの友達よりも良くも悪くもないとみなしていた欧米の先行研究（Blanton et al., 1999; Huguet et al., 2001）の結果とは異なるものであった。外山・桜井（2001）は、能力などの自己概念においては、欧米人とは異なり日本人大学生は、多くの人が自分は平均以下と捉えていることを報告し、その違いを文化的自己観の観点から考察している。また、このような能力の側面において自己を低く捉える傾向は、遅くとも小学校4年生の頃にはすでに獲

得られていることも確認されている（外山・桜井，2000a）。本研究の結果においても、多くの中学生がクラスの友達よりも数学や国語ができないと自己をやや卑下してみなしていることが示された。

比較水準の選択

数学ならびに国語の教科において、学業的遂行（以下“成績”と示す）を比較する友人を指名した被調査者は、全体のおよそ60%であった。学年別でみると、1年生においてはおよそ64%（数学：65.14%、国語：63.22%）、2年生ではおよそ57%（数学、国語共に56.86%）、そして3年生ではおよそ53%（数学：53.33%、国語：52.82%）であった。先行研究（Blanton et al., 1999; Huguet et al., 2001）においては、約80%程度の中学1年生が成績を比較する友人の名前を記入しており、先行研究と比べると本研究ではその割合が少ないものであった。比較する友人の名前を指名しなかった被調査者が、実際に誰とも比較をしなかったからそうしたのか、あるいは比較する友人がいるものの名前を書かなかったのかどうかは、本研究からは特定できない。しかし、社会的比較の欲求は、人間にとって普遍的である（Festinger, 1954）ことを考慮すると、そこに評価懸念の要因が働いていることも一因であると考えられる。本研究では、答えた内容が他の人（先生や友達）に洩れることは絶対はないことを被調査者に何度か教示したのだが、今後こうした内容の質問にはさらなる配慮が必要になってくるであろう。

なお、比較する友人の指名の有無で、学業成績（2学期末テスト）に違いが見られるのかどうかを学年別に t 検定により検討したところ、2年生の数学以外においては、両者に差は見られなかった。2年生の数学においては、友人を指名した人（ $M=43.56$ ）の方が、友人を指名しなかった人（ $M=54.81$ ）よりも数学の学業成績が良かった（ $t=2.96, p<.01$ ）。2年生の数学においてのみ、なぜ両者に差が見られたのかは不明であるが、ほ

とんどの場合においては比較する友人の指名の有無で、学業成績に違いは見られないことがわかった。

また、成績を比較する友人が数学と国語の2教科ともに同じ人物であった生徒は、比較する友人を指名した被調査者の48.50%であった。さらに、比較する友人を指名した被調査者の97%以上（数学97.82%、国語97.47%）の生徒が、同性の友人を比較相手として選んでいた。これは、人が能力やスキルを評価する際に、自分の性を準拠枠として使用することを示す実験室的研究やフィールド研究（e.g. Blanton, 2001; Miller, 1984）と一致する結果である。

次に、自分の学業成績（1学期末テスト）と比較する友人の学業成績（1学期末テスト）に差が見られるのかどうかを検定するために、学年別に t 検定を行ったところ（Table 1 参照）、1年生においては2教科ともに比較する友人の学業成績のほうが高いことがわかった（数学： $t=4.02, p<.01$ 、国語： $t=2.34, p<.05$ ）。しかし、2年生ならびに3年生においては、2教科ともに自分の学業成績と比較する友人の学業成績には差が見られないことが示された。

Table 1 自己と友人の学業成績の平均値 (M)、標準偏差 (SD) および t 検定の結果

	自己の学業成績		友人の学業成績		df	t
	M	SD	M	SD		
数学						
1年生	45.66	28.01	56.99	30.51	113	4.02**
2年生	54.81	27.24	55.81	28.44	115	0.46
3年生	58.03	29.28	57.90	30.09	103	0.05
国語						
1年生	59.08	17.16	63.65	17.28	109	2.34*
2年生	63.80	18.29	63.86	17.47	115	0.04
3年生	65.10	20.45	66.94	18.20	102	1.03

注) * $p<.05$, ** $p<.01$

本研究の結果より、中学1年生は自分よりも多少学業成績の良い同性の人と成績を比較するが、中学2年生ならびに3年生は、自分と同じくらい

の学業成績の同性の人と比較することが明らかにされた。

比較水準の選択と相対的評価が学業成績の向上に及ぼす影響

以降の分析には、成績を比較する友人の指名を行った被調査者（数学：1年生114名、2年生116名、3年生104名の計334名。国語：1年生110名、2年生116名、3年生103名の計329名）が対象とされた。

比較水準の選択と相対的評価が学業成績の向上を予測するのかどうかを検討するために、自分の2学期末テストを従属変数とし、自分の1学期末テスト、比較水準の選択（比較する友人の1学期末テスト）ならびに相対的評価を基準変数とする重回帰分析を学年別、教科別に行った。結果はTable 2に示されている。

Table 2 2学期の学業成績を従属変数とした重回帰分析の結果

	1年生	2年生	3年生
数学			
1学期の学業成績	.73**	.76**	.85**
比較水準の選択	.13**	.12*	.07
相対的評価	.14**	.10 †	.03
<i>R</i> ²	.79**	.82**	.85**
国語			
1学期の学業成績	.71**	.79**	.80**
比較水準の選択	.20**	.09	.06
相対的評価	.10*	.08	.05
<i>R</i> ²	.74**	.75**	.72**

注1) †*p*<.10, **p*<.05, ***p*<.01

注2) 数値は標準偏回帰係数を表す。

まず、数学においては、自分の1学期末テストの標準偏回帰係数は、全学年において有意となった（順に、 $\beta = .73, .76, .85, p < .01$ ）。そして、1年生と2年生において比較水準の選択の標準偏回帰係数が有意であった（順に、 $\beta = .13, p < .01$ ； $\beta = .12, p < .05$ ）。さらに相対的評価においては、

1年生で標準偏回帰係数が有意水準（ $\beta = .14, p < .05$ ）、2年生においては有意傾向（ $\beta = .10, p < .10$ ）であった。なお、3年生においては比較水準の選択、相対的評価ともに有意な標準偏回帰係数は見られなかった。

次に、国語においては、1学期末テストの標準偏回帰係数は、全学年において有意となった（順に、 $\beta = .71, .79, .80, p < .01$ ）。そして、1年生においては比較水準の選択と相対的評価の標準偏回帰係数が有意であった（順に、 $\beta = .20, p < .01$ ； $\beta = .10, p < .05$ ）が、2年生と3年生においては、比較水準の選択と相対的評価では有意な標準偏回帰係数は見られなかった。

本研究の結果より、中学1年生の数学と国語、そして2年生の数学においては、比較水準の選択と相対的評価の高さが、学業成績の向上を独立に予測していることが示された。よって、社会的比較が学業場面における遂行において重要であることが実証された。

一方、中学2年生の国語ならび3年生の数学と国語においては、社会的比較が学業成績の向上を予測せず、Huguet et al. (2001) も指摘しているように、社会的比較の影響は新しい環境において大きく、時間が経つにつれてその影響はなくなっていくことが明らかにされた。

学業成績と比較水準の選択が相対的評価に及ぼす影響

個人の学業成績と比較水準の選択が相対的評価にどのように関連するのかが検討するために、相対的評価を基準変数とし、自分の学業成績（1学期末テスト）と比較水準の選択（比較する友人の学業成績（1学期末テスト））を説明変数とする重回帰分析を行った（Table 3参照）。その結果、2教科ともに、全学年において、相対的評価に影響を及ぼすのは自己の学業成績であって、比較水準の選択によっては影響されないことがわかった。

本研究の結果は、人が相対的評価をする際には、比較相手の遂行によってではなく、自分自身の能力に反映していることを主張している見解 (e.g. Diener & Fujita, 1997; Wood, 1996) と一致するものであった。

Table 3 相対的評価を従属変数とした重回帰分析の結果

	1年生	2年生	3年生
数学			
自分の学業成績	.67*	.47**	.59**
比較水準の選択	.05	.14	-.04
R^2	.49**	.32**	.32**
国語			
自分の学業成績	.39**	.40**	.33**
比較水準の選択	.02	.04	-.06
R^2	.15**	.17**	.09**

注1) $p < .01$

注2) 数値は標準偏回帰係数を表す。

総合的考察

本研究の結果より、中学生の学業成績の向上における比較水準の選択の影響は、学年によって異なることが明らかにされた。まず、中学1年生においては、数学と国語の2教科ともに、自分よりも幾分優れている同性の友人と学業成績の社会的比較を行い、そして、こうした自分よりも優れた友人と比較することが学業成績の向上につながることを示された。これまでの比較水準の選択と遂行の関連性を扱った研究の多くは、実験室的研究 (e.g. Huguét, Galvaing, Monteil, & Dumas, 1999; Seta, Seta, & Donaldson, 1991) によるものであったが、日常生活の学業場面においても比較水準の選択が遂行の向上に影響を及ぼすことが示された。

一方、中学2年生ならびに3年生においては、1年生で見られたような自分よりも優れている友人との社会的比較の傾向は示さず、自分と同じくらいの学業成績の友人との社会的比較を行うこと

が明らかにされた。また、そうした友人の学業成績の高さは、中学2年生の数学の学業成績の向上においては影響が見られたものの、国語の学業成績の向上においては影響が見られず、中学3年生においては2教科ともに学業成績の向上には影響が見られなかった。

中学校は、これまでの小学校との学習環境とは異なり、生徒により挑戦的な環境を与えるところである。例えば、学習内容の面ではより高度化・専門化してくるし、何よりも定期試験という形で校内一斉テストによって学習の評価が行われることが、小学校との大きな違いである。このような新しい環境における自分の位置がわからない不確かさと同時に、新しい環境への期待や目新しい出来事を経験によって学習に対する意欲が高まるために、中学入学後当初 (中学1年生) においては、学業に対する積極的な自己向上の動機づけが高くなるのであろう。新しい環境や環境の移行時には、社会的比較の量が増加すること (Gibbons & Buunk, 1999) や成績向上の動機づけの高い時には、自分よりも優れた他者との社会的比較を捜し求めようとする (Wheeler, 1966; Suls & Tesch, 1978) が示されている。これらの知見を併せて考えると、中学1年生においては、自分の成績を向上させ、他者をしのごうとする自己向上の欲求が作用するために、自分よりわずかに優れている他者が比較の相手として好まれるものと考えられる。そして事実、優れた友人と比較することによって成績の向上が見られた。

他方、中学2年生ならびに3年生においては、何度か定期テストを経験し、自分の位置がある程度確定してくると、中学1年生が示すような積極的な自己向上は見られなくなり、そうした社会的比較は学力の向上に影響を及ぼさなくなると考えられる。人は、現在の動機づけに合わせて、社会的比較の方略を変えることが指摘されている (e.g. Taylor & Lobel, 1989; Wood, 1989; Wood & Taylor, 1991)。例えば、自己高揚の欲

求が優勢な時には、自分よりも劣った他者との社会的比較を捜し求めようとする (e.g. Pyszczynski, Greenberg, & LaPrelle, 1985) が、自己向上の欲求が優勢な時には、自分よりも優れた他者との社会的比較を捜し求めようとする (e.g. Suls & Tesch, 1978)。そして、純粋な自己評価の欲求が強い時には、自分と能力が同じくらいの他者が比較の相手として好まれるのであろう。本研究の結果においても、生徒の比較水準の選択は、比較の背後にある動機づけの兆候であることを示唆している。

研究者の中には (e.g. Goethals & Darley, 1987; Levine, 1983)、教室を子どもの自尊感情にダメージを与える潜在能力が高い脅威的な場所として捉えている者もいるが、おそらくそうではない。中学1年生においては、そこでは、比較する友人が成功のモデルとして機能するのである。問題なのは、学年とともに自己向上が見られなくなることであろう。本研究の結果は、中学1年生で見られていたような自己向上を継続させるような教育的な援助の必要性を示唆するものである。

一方、学業成績の向上における相対的評価の影響においては、中学1年生の数学と国語および2年生の数学以外においては、その影響は見られなかった。Blanton et al. (1999) の研究においては、比較水準の選択 ($\beta = .08 \sim .17$) よりも相対的評価 ($\beta = .24 \sim .45$) のほうが学業成績の向上に影響を及ぼしていた点が興味深い。日本人は能力の相対的評価においては、自分を平均以下に捉えるネガティブ・バイアスが見られることは先に述べ、本研究の結果でもそうであった。また、欧米人が自己をポジティブに捉えることのみが精神的健康に結びつきやすい (e.g. Taylor & Brown, 1988) のに対して、日本人においては必ずしもそうではなく、自己を平均的に捉えることもまた精神的健康につながるということが報告されている (外山・桜井, 2000b)。本研究の結果からも、他者と比べての有能感、すなわち相対的評価の影

響には文化差が見られ、日本人中学生においては成績の向上にはあまり影響を及ぼさないことがわかった。

ところで、本研究の結果より、すべての学年において相対的評価に影響を及ぼすのは、自分自身の学業成績であって、比較する友人の学業成績によっては影響されないことがわかった。このことは、人が相対的評価をする時に、特定の他者を反映させているわけではないこと (e.g. Alicke, Klotz, Breitenbecher, & Yurak, 1995; Weinstein & Lachendro, 1982) を示すものであり、比較相手の能力を自由に無視することができることを意味するものである。このように考えるならば、Wood (1996) も述べているように、相対的評価は社会的比較自体と無関係であるのかもしれない。今後、相対的評価については慎重に議論する必要がある。

最後に、本研究の限界ならびに今後の課題としていくつか提示しておく。まず、中学1年生の数学と国語および中学2年生の数学において、比較水準の選択が学業成績の向上につながる所以には、先に述べた動機づけの問題の他に、優れた他者を観察することによって、向上するやり方についての役立つ情報を得ることができ (e.g. Buunk & Ybema, 1997; Taylor & Lobel, 1989)、自分にも潜在能力があると考えられる (e.g. Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, Dakof, 1990; Lockwood & Kunda, 1997) といった問題も考えられる。そういった要因が相まって、学業成績の向上が見られたものと推察される。今後は、比較水準の選択と遂行との関連性に影響を及ぼすメカニズムについて検討していく必要がある。さらに、本研究の結果より、社会的比較の影響は学年によって異なり、社会的比較が時間とともに絶えず展開するダイナミックな過程——少なくとも学校環境においては—— (Monteil & Michinov, 1996) であることが示された。今後は継時的な変化を追跡する縦断的パネル調査が必

要となってくるであろう。また、本研究では、数学と国語の2教科を取りあげたが、両者の結果は多少異なっていた。今後は国語と数学以外の様々な教科を用いて検討していく必要がある。

本研究で得られた知見を1つの布石として捉え、既述した諸問題を解明すべく、さらなる研究の集積が必要となろう。

引用文献

- Alicke, M.D., Klotz, M.L., Breitenbecher, D.L., & Yurak, T.L. 1995 Personal contact, individualization, and the better-than-average effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 804-825.
- Bandura, A., & Jourdan, F.J. 1991 Self-regulatory mechanisms governing the impact of social comparison on complex decision-making. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 941-951.
- Blanton, H. 2001 Evaluating the self in the context of another: The three selves model of social comparison assimilation and contrast. In G.B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition*. LEA: Mahwah, NJ. Pp.75-87.
- Blanton, H., Buunk, B.P., Gibbons, F.X., & Kuyper, H. 1999 When better-than-others compare upward: Choice of comparison and comparative evaluation as independent predictors of academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 420-430.
- Boggiano, A.K., Main, D.S., & Katz, P.A. 1988 Children's preference for challenge: The role of perceived competence and control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 134-141.
- Butler, R. 1992 What young people want to know when: Effects of mastery and ability goals on interest in different kinds of social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 934-943.
- Buunk, B.P. 1995 Comparison direction and comparison dimension among disabled individuals: Towards a refined conceptualization of social comparison under stress. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 316-330.
- Buunk, B.P., Collins, R., Taylor, S.E., Van Yperen, N.W., & Dakof, G. 1990 The affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1238-1249.
- Buunk, B.P., & Ybema, J.F. 1997 Social comparisons and occupational stress: The identification-contrast model. In B.P. Buunk & F.X. Gibbons (Eds.), *Health, coping, and well-being: Perspectives from social comparison theory*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.359-388.
- Diener, E., & Fujita, F. 1997 Social comparisons and subjective well-being. In B.P. Buunk & F.X. Gibbons (Eds.), *Health, coping, and well-being: Perspectives from social comparison theory*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.329-358.
- Elliot, A.J., & Church, M.A. 1997 Hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 218-232.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Frey, K.S. & Ruble, D.N. 1985 What children say when the teacher is not around: Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 550-562.
- Gibbons, F.X., & Buunk, B.P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 129-142.
- Goethals G.R., & Darley, J. 1987 Social comparison theory: Self-evaluation and group life. In B.

- Mullen & G.R. Goethals (Eds.), *Theories of group behavior*. Springer-Verlag: New York. Pp.21-47.
- Guay, F., Boivin, M., & Hodges, E.V.E. 1999a Predicting change in academic achievement: A model of peer experiences and self-system processes. *Journal of Educational Psychology*, 91, 105-115.
- Guay, F., Boivin, M., & Hodges, E.V.E. 1999b Social comparison processes and academic achievement: The dependence of the development of self-evaluations on friends' performance. *Journal of Educational Psychology*, 91, 564-568.
- Huguet, P., Dumas, J.F., Monteil, J.M., & Genestoux, N. 2001 Social comparison choice in the classroom: Further evidence for students' upward comparison tendency and its beneficial impact on performance. *European Journal of Social Psychology*, 31, 557-578.
- Huguet, P., Galving, M.P., Monteil, J.M., & Dumas, F. 1999 Social presence effects in the Stroop task: Further evidence for an attentional view of social facilitation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1011-1025.
- 市原学・新井邦二郎 2004 学習場面における有能感と興味の発達 — 小学4年生から中学3年生までを対象とした横断的研究 — 筑波大学心理学研究, 27, 43-50.
- (Ichihara, M., & Arai, K. 2004 The development of academic perceived competence and intrinsic interest: A cross-sectional study in grade 4 through 9 students. *Tsukuba Psychological Research*, 27, 43-50)
- Klein, W.M., & Weinstein, N.D. 1997 Social comparisons and unrealistic optimism about personal risk. In B.P. Buunk & F.X. Gibbons (Eds.), *Health, coping, and well-being: Perspectives from social comparison theory*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.24-62.
- Levine, J.M. 1983 Social comparison and education. In J.M. Levine & M.C. Wang (Eds.), *Teacher and student perceptions: Implications for learning*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. 1997 Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 91-103.
- Marsh, H.W. 1987 The big-fish-little-pond effect on academic self-concept. *Journal of Educational Psychology*, 79, 280-295.
- Marsh, H.W. 1994 Using the national longitudinal study of 1988 to evaluate theoretical models of self-concept: The self-description questionnaire. *Journal of Educational Psychology*, 56, 439-456.
- Marsh, H.W., Chessor, D., Craven, R., & Roche, L. 1995 The effects of gifted and talented programs on academic self-concept: The big fish strikes again. *American Educational Research Journal*, 32, 285-319.
- Marsh, H.W., Kong, C.K., & Hau, K.T. 2000 Longitudinal multilevel models of the big-fish-little-pond effect on academic self-concept: Counterbalancing contrast and reflected-glory effects in Hong Kong schools. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 337-349.
- 松岡陽子 2003 動機づけの対人的文脈 — 「関係性」概念の再考を通して — 心理学評論, 46, 46-54.
- (Matsuoka, Y. 2003 Interpersonal contexts of motivation: Reconsidering the concept of relatedness. *Japanese Psychological Review*, 46, 46-54)
- Miller, D.T. 1984 Self-schemas, gender, and social comparison: A clarification of the related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1222-1228.
- Monteil, J.M., & Michinov, N. 1996 Study of some determinants of social comparison strategies using a new methodological tool: Towards a dynamic approach. *European Journal of Social Psychology*, 26, 981-999.

- Pomerantz, E.M., Ruble, D.N., Frey, K.S., & Greulich, F. 1995 Meeting goals and confronting conflict: Children's changing perceptions of social comparison. *Child Development*, 66, 723-738.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., & LaPrelle, J. 1985 Social comparison after success and failure: Biased search for information consistent with a self-serving conclusion. *Journal of Experimental Social Psychology*, 21, 195-211.
- Seta, J.J., Seta, C.E., & Donaldson, S. 1991 The impact of comparison processes on coactors' frustration and willingness to expend effort. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 560-568.
- Suls, J.M., & Tesch, F.E. 1978 Students' preferences for information about their test performance: A social comparison study. *Journal of Applied Social Psychology*, 8, 189-197.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社 (Takata, T)
- 田中あゆみ・山内弘継 2000 教室における達成動機, 目標志向, 内発的興味, 学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, 71, 317-324.
(Tanaka, A., & Yamauchi, H. 2000 Causal modes of achievement motive, goal orientation, intrinsic interest, and academic achievement in classroom. *The Japanese Journal of Psychology*, 71, 317-324)
- Taylor, S.E., & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- Taylor, S.E., & Lobel, M.L. 1989 Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, 96, 569-575.
- Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 187-227.
- 外山美樹 2001 幼児・児童における社会的比較の発達の变化 教育心理学研究, 49, 500-507.
(Toyama, M. 2001 Developmental changes in social comparison in preschool and elementary school children: Perceptions, feelings, and behavior. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 49, 500-507)
- 外山美樹 2004 中学生の学業成績と学業コンピテンスの関係に及ぼす友人の影響 心理学研究, 75, 246-253.
(Toyama, M. 2004 Comparison with friends, closeness of friendship, and academic achievement and perceived academic competence of junior high school students. *The Japanese Journal of Psychology*, 75, 246-253)
- 外山美樹・桜井茂男 2000a 児童と成人におけるポジティブ・イリュージョン 筑波大学心理学研究, 22, 191-196.
(Toyama, M., & Sakurai, S. 2000a Positive illusions for children and adults. *Tsukuba Psychological Research*, 22, 191-196)
- 外山美樹・桜井茂男 2000b 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461.
(Toyama, M., & Sakurai, S. 2000b Self-perception and mental health. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 454-461)
- 外山美樹・桜井茂男 2001 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72, 329-335.
(Toyama, M., & Sakurai, S. 2001 Positive illusions in Japanese students. *The Japanese Journal of Psychology*, 72, 329-335)
- 上淵寿 1995 達成目標志向性が教室場面での問題解決に及ぼす影響 教育心理学研究, 43, 392-401.
(Uebuchi, H. 1995 Effects of achievement goal orientations on problem solvings in classroom settings. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 43, 392-401)
- Veroff, J. 1978 Social motivation. *American Behavioral Scientist*, 21, 709-730.
- Weinstein, N.D., & Lachendro, E. 1982 Egocentrism as a source of unrealistic optimism.

- Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 195-200.
- Wentzel, K.R. 1999 Social influences on school adjustment: Commentary. *Educational Psychologist*, 34, 59-69.
- Wheeler, L. 1966 Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 27-31.
- Wood, J.V. 1989 Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, 106, 231-248.
- Wood, J.V. 1996 What is social comparison and how should we study it? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 520-537.
- Wood, J.V., & Taylor, K.L. 1991 Serving self-relevant goals through social comparison. In J. Suls & T.A. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.23-50.

<付記>

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による助成を受けた。本研究にご協力いただきました中学校の諸先生ならびに生徒の皆様にご心より御礼申し上げます。また、本論文の執筆にあたり、貴重なアドバイスをいただきました東京成徳大学大学院助手の市原学さんにお礼申し上げます。

Social comparison in improved academic performance with a sample of junior high school students

Miki TOYAMA (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science,
Faculty of Humanities, Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the role of social comparison in students' improved academic performance. Participants were 545 junior high school students. The results showed that a grade difference might exist the role of social comparison in students' improved academic performance. The present study found that first-grade students who nominated a comparison-target in both math and Japanese chose same-sex students who were slightly outperforming them in class. This had a beneficial effect on children's course grades, which were also independently predicted by comparative evaluation (how the children evaluated their relative standing in class). These results provide a significant real-world demonstration that social comparison is a determinant of performance level. On the other hand, such was not the case for second-grade and third-grade students. These findings suggest that the effects of social comparison diminish over time.

KEYWORDS: social comparison, improved academic performance, junior high school students